

2012年11月27日

生消協 事務局

2012年度 生消協「青年農業者交流会」報告書

日時：2012年11月22日（木）～23日（金）

場所：福島県いわき市（メイン会場 スパリゾートハワイアンズ、被災地各所、オーガニックコットン圃場など）

内容：以下行程表参照

◎ 2012年 11月22日（木）

13：00～ 開会 青年農業者交流会開催の趣旨説明及び挨拶

13：15～ 講演「震災を乗り越えて・福島県農業の歩み」

NPO法人 福島県有機農業ネットワーク 齊藤 登様

NPO法人 福島県有機農業ネットワーク 杉内 清繁様

15：30～ グループディスカッション

17：15～ グループディスカッションのまとめ

17：45 初日のプログラム終了

◎ 2012年 11月23日（金）

※ 次の内容に沿って2つのグループに。

①コットン援農コース（定員40名）

09：00 ハワイアンズ出発

09：40～ コットン圃場で収穫作業

11：30～ 昼食交流スカイストアー

②被災地スタディコース（定員40名）

09：00 ハワイアンズ出発

薄磯海岸～久ノ浜～仮設商店街～四倉道の駅（昼食）

概要：全国25産地から約70名の青年農業者が集う。パルシステム福島の全面的な協力を得てスパリゾートハワイアンにて開催。関係者を含めて95名の大きな企画となった。初日は福島県の郡山に拠点を持つNPO法人福島県有機農業ネットワークの方々から現地の放射性物質、風評被害との戦い、現状での戦略などを伺った。2部構成の後半は、グループミーティングで「ワールド・カフェ」を取り入れ全員が議論に参加。2日目はコットンプロジェクト視察と被災地視察の2つのコースに分かれフィールドワーク。アンケートからは好評だったが次年度以後の企画内容検討は必要。

詳細：福島県いわき市のスパリゾートハワイアンズにて、「絆・想い・希望をもって未来を創ろう」をテーマに、「青年農業者交流会イン福島」を開催。例年は東京で開催されてきましたが、今年の交流会は昨年発生した東日本大震災を受け、今の東北に学ぶという目的から福島県で集まることとした。

生消協の香取政典代表幹事（佐原農産物供給センター）は、開会にあたり「震災から1年8か月経って、ここに若い人たちが全国から集まりました。現状を肌で感じ、現場の声を聞いて、この福島にて皆さんで共有しながら、これからの農業や自分の人生そのものについて考えて行動して欲しい」と

挨拶。パルシステム福島の和田理事長は「福島県は『がんばろう福島』を合言葉に前に向かって努力していますが、なかなか復興が進まないのも事実です。こういった状況は、口ではなかなか伝わりませんので、ぜひ被災地を、特に福島県を訪れて欲しいとお願いし続けてきました。それが今日実現できたことを本当に嬉しく思います。ここで見て聞いて感じたことを地元を持ち帰って、周りの方にお伝えいただきたい。どうか風化させないようにお願いします」と参加者に呼びかけた。



交流会の前半では、NPO法人福島有機農業ネットワークの齋藤登さんと杉内清繁さんが「震災を乗り越えて・福島県農業の歩み」という議題で講演。

齋藤さんは福島県の紹介、そして風評被害の状況について説明。今年11月2日までに全袋検査を受けた福島産米は約700万袋で、100ベクレルを超えたのは7袋。この検査結果について報道では「福島で7検体が100ベクレル超え」と取り上げ。これを受けて齋藤さん

は、「700万のうちのたった7袋しか検出されていないのに、こういう出し方をされると、福島の米全部が問題だと思われてしまう。これが風評被害の元凶。もっと正確にこういう状況を知ってほしい」と訴えた。

また、このような風評被害対策の一環として、齋藤さんは昨年130回も東京に出向き、福島の野菜を直接販売。その中で「福島県産は食べない」という人が約5割、「情報不足により福島産は食べない」という人が約3割、「食べて応援する!」という人が約2割、というような消費者の動向が見えてきたとのこと。『福島産は食べない』と言っている5割の人たちを説得してもすぐには戻ってこない。大事なのは『情報不足により福島産は食べない』という3割の人たちに、現実の情報を伝えること。ただし、行政やマスコミが大丈夫と言ってもダメです。直接福島県の農家が消費者に語りかけることで信用してくれるようになる」と自身の活動について話された。

続いて講演した杉内清繁さんは、現在取り組んでいる菜種による放射能除染のプロジェクトについて報告。菜種という植物はセシウムを吸収しますが、そこから搾った油にはセシウムは混入しないということが実証されています。「その油を有効利用し、また多くの人に広げ、地域の復興や農業を展開する一つの手段として展開していきたい」と杉内さんは語った。



後半はグループ・ディスカッションを行った。日頃の立場や年齢に関係なく、自由に意見を出し合い、相互理解を深めるという「ワールド・カフェ」方式で、3つのテーマに沿って話し合う。テーマ毎にメンバーを入替えより多くの人とコミュニケーションも可能。テーマは「先ほどの講演を聴いて、どんなことを感じ考えましたか?」「30年後、日本で暮らす人たちが誇りに思える日本農業の価値とは、どのようなものであってほしいですか?」「信頼と相互理解のある日本農業を回復するために、私たち(生消協)にできることはどのようなことがあるのでしょうか?」の3つ。若手生産者がお互いの意見を出し合う、貴重な交流の場となった。



2日目には、オーガニックコットン・プロジェクトの圃場視察「コットン農延コース」と、被災地を訪問する「被災地スタディコース」の2つのフィールドワークを行った。

被災地コースでは東日本大震災で被災を受けた地元旅館「古滝屋」の若旦那が現地のガイドを行い、被災に合った中学校跡地、他の津波被災現場、仮設避難商店街、復興中の道の駅などを見学。



以上